

イザベラ・バード秋田の旅（9）米代川編

2018年9月30日 掲載



滝のような雨が降り、目の前の米代川はごう音を立てて流れていく。1878（明治11）年7月27日、「切石の渡し」（現能代市二ツ井町）に到着すると、既に渡し舟は止められていた。だが北海道への旅を急ぐイザベラ・バードは、舟を雇って上流の小繫＝こつなぎ＝（同）へ向かった。増水した川をさかのぼるといふのに、バードは冒険心を刺激されていたらしい。「何事もない旅が二、三日続いたあとだったから、この舟旅には心昂（たか）ぶった」（金坂清則訳注「完訳日本奥地紀行」より）

米代川が横断する二ツ井町は、舟なしに羽州街道を進むことはできなかった。渡し場は二つあり、とりわけ北から加護山（きみまち阪）、南から七座（ななくら）山がせり出す場所にある「一里の渡し」は難所として知られた。

禁を破って米代川をさかのぼったバードは、屋形船とあわや衝突という危機に遭遇。翌日も「狂気の沙汰」と自認しつつ、増水した米代川の支流を徒（かち）渡りしている。この時のバードは背中が痛むがひどく、旅を続けるにも不安を抱いていた。だが米代川が現れるたび、闘志をむき出しにして先を目指した。



バードを含め、多くの旅人の前に立ちはだかった米代川。だが、きみまち観光ガイドの会の大高一彦さん（74）は「難所ではあったが、米代川とその支流によって二ツ井は人と物が集まる場所でもあった」と語る。

それを象徴するのが加護山製錬所跡。1774（安永3）年、粗銅から銀を抽出する新たな製錬所を建設するに当たり、藩は原材料を集めやすいとして加護山を選んだ。粗銅は阿仁銅山から阿仁川で、製錬に使う鉛は太良（だいら）鉾山（現藤里町）から藤琴川で、燃料の薪炭も周辺の流域から集められた。製錬された製品は米代川を下って能代へ、そこからさらに大坂へ運ばれた。

雄物川舟運の主力が米だったのに対し、米代川舟運の中心は銅や秋田杉。切り出した秋田杉を組んで米代川を下る筏（いかだ）流しは、二ツ井町にあった大規模な貯木場を中心に1964（昭和39）年まで行われた。



筏も渡し舟も随分前に姿を消したが、今は色とりどりのカヌーが米代川に見られる。NPO法人二ツ井町観光協会が運営するカヌー拠点「天神工房」で管理者を務める成田恭一さん（65）は「普段は川の流れが穏やかで初心者も安全。何より景色が良い」と語る。

「眼前に絵のように美しい風景が現れた」。日本奥地紀行でバードがこう記したのは小繫付近とみられる。カヌーに乗って見渡すと、右岸は7月にリニューアルオープンした道の駅ふたつ、左岸は七座山。天然秋田杉が保護され、今なお深い緑に覆われている。